

「NP ダ」をめぐって

大野 仁美

キーワード: コピュラ、日本語、「ダ」、情報構造

要旨

日本語において文末に置かれる「ダ」が述語名詞句に後続しており、その主語となる名詞句が存在する場合、「ダ」はコピュラであると解釈されうる。しかし文中には NP が 1 つしかない場合も、また NP が 2 つあってもそれらが主語と述語の関係になっていない場合もある。後者のような例としてよく知られているものにはいわゆる「ウナギ文」があるが、その解釈をめぐっては省略や分裂文といった文の情報構造の分析が大きく関与する。本稿では「ダ」が省略などの情報構造上の現象と深く関わりをもつことを示したのちに、コピュラそのものが焦点マーカールと解釈される言語の例をあげ、日本語の「ダ」そのものはどの程度あるいはどのように情報構造と関わりを持つと考えられるのか問題を提起する。

1. 「NP ダ」

現代日本語において文末におかれる「ダ」が、どのような機能を果たしているか、どのように品詞分類すべきか、また同形式（とおもわれるもの）がほかのどのような位置で生起してその機能は文末のそれと同じかどうか等については、日本語文法において議論の対象となってきた。本稿ではそのうち、名詞句に後続した「ダ」（「NP ダ」と呼ぶ）が談話の中でどのように用いられているかをみる。なおここで「ダ」は、便宜的に「ダ・デアル・デス・デゴザイマス」等の代表として、それぞれの間に見られる違いについては触れずに用いることとする。

2. コピュラ

文の述語は動詞(verbal predicate)かそれ以外か (non-verbal predicate : 非動詞述語)でわけられ、多数派である前者と少数派である後者は異なる振る舞いをするのが知られている。非動詞述語のうち、本稿では名詞述語のみを対象とする。

名詞述語 Y が、主語 X とともに、X であるモノや人が Y と同一のものごとであったり（例：「オバマ氏はアメリカの大統領である」）、Y というカテゴリーの 1 つであったり（例：「オバマ氏はアメリカ人である」）することを表現する文を構成するにあた

なおコピュラの「必須性」に関しては、「現在時制で省略」されるのではなく、時制を表示しなければいけない場合にコピュラが出現すると考える理論もある (Dik (1989: 165-169)による copula-support)。時制表示が必須で、分析的に時制だけをしめす過去や未来のマーカーが存在せずそれが動詞によって示され、コピュラが動詞であるならば、それは必然的に意味的に空(semantically empty)であるコピュラが担うことになる。時制の表示がない場合は現在時制と解釈されるのであれば、そこではコピュラは不要である。

次に、NP が 1 つしかない場合をみる。日本語の「ダ」は、単独の NP に付加して文を形成することもある。単語 1 つに「ダ」が付加したものは、いわゆる「一語文」(尾上 2001 ; 仁田 1997 ; 劉 2012, etc.) の 1 つとして扱われてきた。例(3)は一語文の例、例(4)は名詞「本」に關係代名詞節が付加している例であるが、ともに「NPダ」の構造をもっている。

(3) [本]ダ

(4) [[私がさがしていた]本]ダ

定義上、コピュラは、それが連結すべき X と Y という 2 つの名詞句の存在を必須とするので、上記の「ダ」が通常のコピュラであるならば、主語 X が省略されていると考えることになる。そうでないなら、つまり省略されたあるいは復元可能な名詞句を想定しないとするならば、「ダ」は 1 項コピュラと考えることになる。そのような例としてハウサ語の例をあげておく。

(5) ハウサ語(Hausa) (Schachter & Shopen 2007: 55 の例 172)

Audu ne
アウドゥ COP ‘It’s Audu アウドゥだ’

3. XハYダ (ただし X≠Y)

次に、名詞句が 2 つあっても、それらが主語と名詞述語の関係になっていない場合をみる。しばしば「ダ」が用いられる基本的な文構造として、“XハYダ”があげられるが、この X と Y の関係は、かならずしも主語とその名詞述語というわけではない。そのよく知られている例が「うなぎ文」である。

例(6)は奥津(1978: 12)があげているもので、このような文を解釈するには、それがどのような文脈の中に位置するものなのか、つまり、それが発話であるなら、当該の発話前後で、話者間に共有されているが形式上表現されていない情報がその発話の意味内容を処理するにあたって必要であることが示されている。この場合、「僕＝うなぎ」ではないので、「ダ」はコピュラではない。

(6) (奥津(1978: 12)より)

友人と料理屋に行って

「君ハ 何ニスル」

と質問する。このような言語的コンテキストがあつて

「ボクハ ウナギダ」

と答えれば、「ボクハウナギニスル」の意味になる。

この「僕はうなぎダ」文は、実際は“XハYダ”という構造の分析という本題とは関わりが薄いさまざまな要素が複合してからんでいる文であつたことにふれておく。「僕はうなぎダ」文に対して、杉浦(1991)は、それまで注目されていなかった「ダ」の有無が与える意味の違いに光を当て、performative/constative という観点(Austin 1962)からの明晰な分析を提示している。杉浦が指摘するように、「僕はうなぎダ」が注文の場で用いられるとしたら performative な発話になってしまう。たとえば、おなじ食事の注文の場面だとしても、以下のような例なら嫌いであるものを述べているだけなので、performative な解釈はされにくい(カッコは内の要素が省略可能であることを示す)。

(7) 食事の注文をなににするか決めている場面での話者 A・B・C の会話

A: 何食べようか? 何か、きれいなものある?

B: お寿司(です)。

C: (僕は) うなぎ(です)。

杉浦(1991)はまた同時に、「僕はうなぎ(ダ)」という発話がなされうる状況を、たとえば北原(1981)の記述と比べて、より explicit に定義している。つまり：うなぎを注文するにあたって、「僕は」と言える状況というのは、店側からみて注文を問うている相手が「僕」一人ではなく他の客もいる場合に限られる。客が「僕」一人しかいなかったら、注文が「僕」のものであることは明白なので、あえて言う必要はなく、むしろ言うのが不自然である。また「僕は」の「は」は、他の客と一緒に自分の注文を伝えるのであれば、「僕、うなぎ」だけでよいので、これも杉浦が指摘しているように「対比」(杉浦 1991: 85)であると考えた方がより自然である。その場合、「僕は」は contrastive topic であるために出現していると考えられる。

さて、この文を解釈するにあたっては、奥津(1978)の述語代用説や北原(1981)に代表される(疑似)分裂文説などが展開されてきた。奥津(1978)の解釈は、この文は動詞「僕はうなぎを食べる」の下線部分の代用として「ダ」がその述語の代りに(任意で)用いられている、というものである。また奥津(1981)は、北原(1981)の「分裂文説」に対して、“「前提を含む旧情報」ハ「焦点」ダ”という形をとるが、「うなぎ文」は“XガYダ”の形をとることも可能であること；また、「キミハナニヲタベル?」という質問に

対して「ボクガタバタイノハウナギダ」という分裂文での返答を想定することは難しいこと、などを挙げて批判している。しかし、前者に対しては、“XガYダ”全体が、前提の落ちた焦点になっている、あるいは“XガYダ”全体でコメントを形成している（そしてその中でYを焦点と解釈することもできる）と考えれば問題はないことを指摘しておく。

一方、先に見た杉浦(1991)は、「述語消去」説をたてている。杉浦の説と奥津(1978)のそれとの違いは、「ダ」は「断定」の意味を別個に担っていて述語消去前の元の文に断定の意味がある場合にのみ任意に「ダ」を付加すると杉浦が解釈している点である。本稿では、これらの分析のどれがより妥当であるかなどの判断はしないが、このような議論が省略や分裂文といった情報構造上の現象と「ダ」との関わりを示すものであることを確認しておく。情報構造の統語論的分析は階層化されたCPシステムの解明を目指して精力的になされている(cf. 長谷川(編)2010)。生起場所が主文末ではない「ダ」の例をあげておくと、たとえば、sluice (Ross 1969) された節内で「ダ」の使用がオプションである場合がある(例8と9)。ここでも省略がかかわっているのか分裂文が関わっているのが議論になっている(Ito 2013 etc.)が、先の「うなぎ文」の場合と異なり、「ダ」の出現と performative や「断定」とは関わりがない。

- (8) ケンが誰かに会ったそうだ。 (Takahashi & Lin 1994 の例3より作成)
(9) けどぼくは誰に(ダ)か想像できない。(Takahashi & Lin 1994 の例15より作成)

また、省略に関していうと、コピュラがどのように用いられているかを機能主義的類型論的に調査した Pustet(2003: 59-61)は、コピュラが語用論的な役割をもった要素から出現した可能性のあるものとして日本語を位置づけている(ただし、日本語の「ダ」を用いた構文を proredication だとし、そこではどんな構成要素もほぼ省略可能だとした Martin(1986)に依拠している)。

4. 終わりに：コピュラ＝焦点の例

最後に、名詞述語とともに用いられる要素という意味でのコピュラと情報構造とが深い関わりを持っていることを示す例として、実際にコピュラ＝焦点と解釈されているケースを見る。

イク語 (Kuliak 語の1つ; Kuliak の系統はナイロサハラあるいは未分類) は、ウガンダ北東部のウガンダ・ケニア・スーダンの国境地帯で話されている言語で、基本語順は verb-initial である(VS/VAO)。名詞述語文に用いられるコピュラ要素は7種類あり、X=Yをあらわす(ものの1つの)ためには、格表示が用いられ、Yがコピュラ格 $-k^p$ をとる(Koenig 2008)。以下、例(10)は1項で用いられている例である。

イク語(Ik) (Koenig 2008)

(10) saba-k⁰.

川-COP ‘It’s a river 川だ’ (Koenig 2008: 79 例 33p; 声調は省略)

(11) im-a na ice-ama-k⁰

少年-主格 この Ik-単数-COP ‘This boy is an Ik この少年は Ik だ’
(Koenig 2008: 79 例 33q; 声調は省略)

イク語のコピュラ格は、焦点を表すのにも用いられる。焦点化された項目は常に動詞より前置される (例 12 の下線部)。

(12) ho-ik-o wici-a ats-at-a d^e

家-複数-COP 子供-対格 来る-3 人称.複数-末母音 ダミー代名詞

‘It’s the houses the children are coming from こどもたちが(そこから)くる家だ’
(Koenig 2008: 79 例 34b; 声調は省略)

また、先に1項コピュラとして例(5)であげたハウサ語の *ne* を、Green(2007)は焦点マーカーと解釈している。Greenによると、例(5)「Audu ne アウドゥだ」は、「誰が○○なの？」等の質問の後に「アウドゥだ」と答える際に用いられる、焦点化された文だということになる。

このような焦点とコピュラの関わりは、ちょうど先に見た「うなぎ文」の(疑似)分裂文解釈と連続する。疑似分裂文においても通常“XハYダ”の“Y”に焦点があるとされるからである。しかし焦点性と「ダ」との関わりそのものはどう考えるべきだろうか。また1項の場合も同様に考えるべきだろうか。そう解釈することになにか利点はあるだろうか。本稿では日本語においても情報構造と「ダ」の関わりが深いことを見て来たが、これらの問題を提起して終えることとする。

付記：この研究は、科学研究費補助金(挑戦的萌芽研究 課題番号 25580092 研究代表者大野仁美)を受けて行った研究の初期段階での成果の一部である。

参考文献

- 奥津敬一郎(1978)『「ボクハ ウナギダ」の文法』くろしお出版
 -----(1981)「ウナギ文はどこから来たか」『国語と国文学』58-5: 76-88.
 尾上圭介(2001)『文法と意味 I』くろしお出版
 北原保雄(1981)『日本語の世界 6 日本語の文法』中央公論社
 杉浦滋子(1991)「「だ」の意味～「うなぎ文をめぐる」～」『東京大学言語学論集』12:
 81-95.

- 仁田義雄(1997)「未展開文をめぐって」川端善明・仁田義雄編『日本語文法 体系と方法』1-24、ひつじ書房
- 長谷川信子(編)(2010)『統語論の新展開と日本語研究 命題を超えて』開拓社
- 劉雅静(2012)「一語名詞文から見る「ダ」の意味機能-中国語の“是”との比較を兼ねて-」『日本語文法』12-1: 88-104.
- Austin, J. L. (1962) *How to do Things with Words*. Clarendon Press.
- Dik, S. C. (1989) *The Theory of Functional Grammar: Part 1 The Structure of the Clause*. Foris Publications.
- Green, M. (2007) *Focus in Hausa*. Wiley-Blackwell.
- Ito, M. (2013) “A Preliminary Study on the Sluicing Construction in Japanese”. 『福岡大學研究部論 A 人文科学編』12(4): 19-26.
- Koenig, C. (2008) *Case in Africa*. Oxford University Press.
- Martin, S. E. (1975) *A Reference Grammar of Japanese*. Yale University Press.
- Pustet, R. (2003) *Copulas: Universals in the Categorization of the Lexicon*. Oxford University Press.
- Ross, J. R. (1969) “Guess Who?” In R. Binnick et al., eds., *Papers from the Fifth Regional Meeting of the Chicago Linguistic Society*, Chicago Linguistic Society, 252-286.
- Schachter, P. & T. Shopen, (2007) “Parts-of-speech systems”. In T. Shopen, ed., *Language Typology and Syntactic Description*. Vol. 1 (second edition): 3-61, Cambridge University Press.
- Stassen, L. (2005) “Zero copula for predicate nominals”. In M. Haspelmath et al., eds., *The World Atlas of Language Structures*. Oxford University Press, 486-489.
- Takahashi, D. & S. Lin (2012) “Two Notes on Multiple Sluicing in Chinese and Japanese.” *Nanzan Linguistics* 8: 129-145.

